

# 但惜無上道

博林皓堂

まだおさまりきった、とはいえないにしても、学園紛争は、下火（したび）になつたといえる。学園紛争の、最大の被害者は大学よりも、学究だったと思う。憤死ともいうべき死にかたをした純真そのものの教授もあつたし、極度の疲労のため、結局寿命をちじめた学長もあつた。いたましいと思う。

しかし今、わたくしの言わんとするところはそれらでなく、学究者全体が、紛争の処理、対策のため、あるいは防衛鎮撫のため、連日くたくたになり、研究の時間とエネルギーを浪費喪失したことだろう。アメリカやソ連の月ロケットが花々しい成果をあげているとき、日本の大学のロケットが、線香煙火のように、しゅつとあがつただけで、なんべん繰返えしても失敗ばかりだつことなども、あるいは学園紛争の飛沫を蒙つて、十分の研究ができるなかつたことに、起因するのではないか、とさえわれわれは思う。

但惜無上道は、法華經の中の一句で、上に不惜身命の一句がついている。有名な句である。無上道はあそこでは法華經であり、法華經の真理であるが、広くいえばもちろん仏教の真理ばかりでなく、学究がそれぞれの専門の学問に精魂をつくすなら、それもまた不惜身命、但惜無上道となる。ここ二三年日本の学界は進歩が停頓していかかもしれない。それは大きな損失、ギセイだつたといわねばならない。

しかるに今、わが仏教学部において「論集」が新たに発行されることになったのは、これまでの閉塞をぶちやぶることになるのであって、慶賀すべきことである。しかし最近各学部とも大学発行の紀要の外に、ぞくぞくと論集を出すことになっているが仏教学部のそれが、その模倣なら双手を挙げて快哉をさけぶほどのことではない。仏教学部

としても、紀要、その他幾種類かの刊行物があるのに、なおその上にというならば、たいしたエネルギーと思ふことであるが、数回だけで終ることのないよう、また内容的にも重味のあるものであることを切に望むことである。

但惜無上道について、今わたくしの連想は、正法眼蔵の終りに近い部分が、宗団護持の建前でもあるうか、興聖寺時代の眼蔵各巻が宗旨の基本を示す理論的なものが殆んどであるに対し、永平寺における道元禅師としては晩年ともいうべき時期に説示された眼蔵は、おおむね信仰的、実践的なものであり、また清規に関するものなどである。たとえば發菩提心、出家、出家功德、皈依三宝、供養諸仏、道心、受戒、示庫院、安居などである。どうしてこのような実践的なものが次ぎ次ぎに示されたのかといえば、滅後の正法の護持について、禅師なればこそふかく心をくだいたものと思われる。単伝の正法眼蔵、仏祖の命脉をいかにして護持保任すべきかは、但惜無上道の立場から、

禅師としても心をくだかれたことと思う。ことに出家や出家功德が説かれたことは、その辺に重大な理由があろう。近來いやすつと前から正法眼蔵は一般の知識人にも愛読されているが、「道元禅師は思想的にふかいが、やはり人間である、最初の著述と晩年のそれでは思想的変化がはつきり出ている。若いころには成仏得道についても出家在家の区別をしなかつた。それは「弁道話」に見られる通りである。しかし晩年の「出家」・「出家功德」においては出家成仏が強く打出され、在家成仏は放棄されている」とよく言われる。

それは一応もつともである。しかし宗教としての禅は、もちろん一切衆生の皆成仏を理想とする。在家出家の別はない。晩年禅師が出家道を極度に強調し、在家成仏を否定しているのは思想の変化ではない。但惜無上道の立場から、道を守るもの、正法を護持するものは汝等（弟子たち）以外にない、と固く決意させるために、特に、ことさら出家道の尊さを強調したものである。道元禅師の但惜無上道をわれわれは、こうしたところに捉えるべきである。老後の思想的変化などと、浅薄な見方をしてはならぬ。